

# 校内支援体制の課題（事例から）

## 「サポートの得られない中で（30代男性教師の事例）」

小学校2年生のころに転入してきてから、すぐに学校全体で対応に追われることになったA児がいました。担任は毎年替わっており、A児が4年生になるとき、若い男性ということで、校長の強い希望もあって私が担任することになりました。年上の女性教師は「Aさんは学校の宝だから、みんなで担当しましょう。若い先生はみんなが援助しやすいから、その窓口にちょうどいいわ」と言ってくれました。

しかし、担任をして厳しい現実を知りました。A児を一瞬たりとも1人にすることができないのです。多動で衝動的に動き回り、周りの子どもたちに攻撃的な行動をとるため、危険なことがないようにひとときも目を離すことができませんでした。学校にいる間は、ずっと私がついていなければならない状態で、朝の職員朝会もほとんど出ることはできませんでした。ところが、同僚はそれぞれの学級が大変だという理由で、だれもサポートしてくれませんでした。物理的にサポートが得られるような校内体制もありませんでした。

学級への指導には学年の方針があり、すべての学級が同じような授業の進め方、行事への参加の仕方 をすることが求められましたが、私の学級では、他の学級と同じようにすることは困難を極めました。

2ヶ月たったころ、さすがに厳しくなって校長に相談しました。しかし「みんなそれぞれががんばっているのだから、あなたも愚痴を言わずにがんばってください」と叱咤激励されるだけでした。A児の感情が爆発するごとに授業は中断し、ほかの子どもたちも落ち着きをなくし始めました。私も疲れから、学級の子どもを叱責することが増えていきました。

このような状況でしたが、校務分掌は同僚と同様に割り当てられ、それらの仕事はすべて持ち帰ってやっていました。放課後、やっとの思いで職員室に戻るたびに、お茶を飲みながら談笑している同僚を見て、私は情けない気持ちで一杯になりました。

こうして嵐のような1年が終わりました。私は保護者から「ダメ教師」とうわさされ、逃げるように異動しました。その後、A児の学級は、やはり新しく赴任してきた30代の男性教師が担当したそうです

# 学級・学校（職員室）の中で起こっている問題

## ①対象児

- 発達障害の多様化、複雑化(新しい文化)
- 困り感を言語化することが難しい
- 疎外感、セルフエスティームの低下

## ②学級の子ども

- 対人関係のズレ(変なやつ)
- トラブル回避のため関わりを避けようとしていたり、攻撃的になる（いじめに発展）

## ③保護者

- 自分の子どもしか見えない(家では困らない)
- 個別の配慮への過度な要求
- 周囲からの非難と本児への強い叱責、暴力等

## ④他の保護者

- 関わりをもたないよう子どもに指示
- トラブル解消に対する学級担任への要求
- 対象児の保護者への敵意

(参考)

特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラム開発に関する研究、熊本大学教育学部障害児教育学科、科研費報告書

# 学級・学校（職員室）の中で起こっている問題

## ⑤担任

- 障害のある子供のことは専門家にまかせるべき(自分は専門外)
- 1人の子どもだけを特別扱いできない
- 「診断を受けていない子」には対応できない
- これくらいは大丈夫(もっと大変な子はたくさんいる)
- 発達障害ではなくて、親のしつけ、本人の性格等の問題

## ⑥他の職員

- 自分の学級も大変
- 自分も専門外
- じゃばりたくない(助けを求められたら手伝う)

## ⑦管理職

- 自分も専門外
- 保護者にはいいことを言っても、具体的な対応は担任に任せられている(あんに任せろ！)
- 自分(管理職)の仕事ではない(学年で工夫して。コーディネーターが責任をもって・・・)
- 金も人もない現状では、打開策は考えられない(金や人がついたら何とかする)

# 学校&その他のシステム上での諸課題

## ⑧学校システム

- 「校内学びの支援委員会」は設置されているが機能しておらず、校内支援システムが確立されていない。担任の力量にまかされている。
- コーディネータが超多忙であったり、孤軍奮闘している。または、ただ機械的に配置されている。
- ケースによる軽重が整理されておらず、対応等の優先順位が検討されていない。
- 保護者や他職種 of 専門家、学校全体で協働（コラボレーション）して指導に当たるといった文化がまだ十分育っていない。

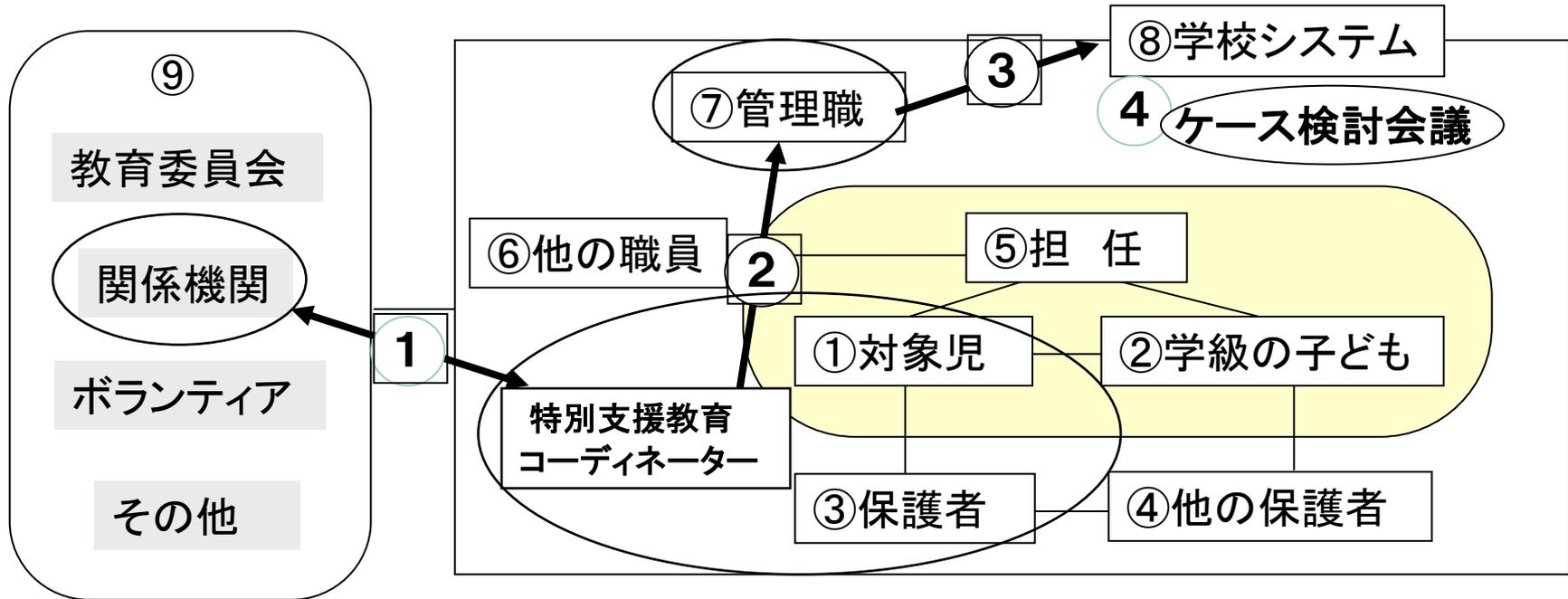
# 学校 & その他のシステム上での諸課題

## ⑨その他のシステム

- 教育委員会：学校を支援するための様々な施策の早急な実施、  
教育相談機能等の充実、情報の共有化
- 関係機関：相談機関や放課後支援サービス（児童会館、クラブ、  
塾、デイサービス）等との連携
- ボランティア：学生や地域のマンパワー導入と人材活用バンク等  
のシステム構築（教育委員会が大学や地域と連携）
- そ の 他：支援情報の引継ぎと効果的な活用（支援ファイル）  
＜個別の（教育）支援計画の実施と情報の共有化  
（縦軸と横軸）＞

# 通常学級における障害のある子どもへの支援の実際

## 支援体制が学校全体に広がっていったケース



- ① 本人、保護者、コーディネーターが教育センターで教育相談を受ける。
- ② 管理職に報告。      ③ 校長がケース検討会議を設定するよう指示。
- ④ 検討会議で、コーディネーターが全職員に相談結果を報告し、今後の対応を検討。



**担任と他の職員に大きな変化が・・・？**

**担任が楽になった！！    自分のクラスもお願いしよう！！    情報が共有化された**

## ケース検討会議(チーム会議)のすすめ

- 情報の整理（共有化）、立ち位置の確認
- 課題解決に向けた様々な方策（引き出し）の共有化
- 指導・支援方法の明確化（指導がぶれない）
- 他職種 of 専門家との協働支援（コラボレーション）
- 援助者の負担軽減（チームワーク、ネットワーク、コラボレーション）
- 多様な支援方法の確立、般化

# 課題整理のための5W1H

「特別支援教育の理論と実践Ⅲ」(金剛出版)から

5WIH	目前のできごとの分析	今までのできごとの分析	確認・決定すること
Who	誰が関わった相手は誰か	当事者は誰？ 相手がいるか？ 同じ子？ 違う子？	児童・生徒の背景情報：課題の傾向、生育歴、認知の特徴の予測、保護者の考え 関わった相手の背景情報の整理
When	いつ	どんな時	いつ困難さが生じるか いつ保護者と話すか
Where	どこで	どんな場所で	どこで支援を行うか 支援の場所を教室以外に設定するか
What	何が起きたか	できごとの類似点、相違点	解決したいものは何か(学習・生活・運動・その他で)、いくつかの出来事の比較
	困難さは何か	困難な場面の分析	どんな場面でどんな困難さが生じているか、パターンを考える
Why	何故起こったか	何故起きたか どのような条件によって起きるか	何故その支援が必要か(児童・生徒の認知の傾向や課題について有効な支援か)関連条件を取り除けるか
How	どのように引き起こされたか	その時はどう対応したか 対応の方法による違いはあったか	どんな支援を行い、本人や保護者にどのように理解をはかるか 支援を展開するにあたっての手続き(組織やチームの了解周辺の児童にどのように理解をはかるか)

## 保護者への対応のポイント

- ①信頼関係の構築（傾聴、受容、共感的理解）：保護者が安心して自分の思いを伝えたい！！という対象（“頼られる教師”）になっているか。
- ②情報の共有化（保護者と学校との受け止め方、困り感は違う）
- ③ まずは、プラス情報を提供せよ。（「〇〇ができません」ではなく「〇〇ができるようになりました」）
- ④ 「困ったこと（実態）」だけではなく、「どうしたら改善できるのか」を一緒に考えること。
- ⑤ 改善に向けての具体的な目標、方法を提示せよ。
- ⑥ 「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」
- ⑦ 期限(短期目標)、次回の相談日を必ず決め、評価する。

**【質問】** 発達障害を個性と捉えて障がいを疑おうとしない親、うちの子は大丈夫だからといって専門機関への相談を拒否する親への対応。保護者を納得させる良い方法があるといいのだが・・・

**(考えるポイント)**

- ①発達障害は病気か、障がいか、治るのか、治らないのか
- ②保護者は本当に疑っていないのだろうか？ もし疑っているとしたら、拒否するのは何故？、何が原因？
- ③もし、あなたが保護者の立場だったらどう思う？
- ④対象の幼児は困った子？、困っている子？ この子はわざとに悪さをしているの？

【質問】 特別支援学級(学校)での支援が妥当と思われる生徒の保護者に対してどのようにアプローチすればいいの？

### (考えるポイント)

- ①教師は、特別支援学級（学校）を勧められる保護者の気持ちをどの程度受容し、共感（自己一致）できているか？
- ②教師は、当該生徒にとって特別支援学級（学校）が明らかに有効であるという根拠をどの程度持っているか？  
または、それを示す根拠をどの程度用意しているか？
- ③患者にガンが見つかったとき、医者は患者（またはその家族）にどのように伝えるか？ それでは、教育の専門家である教師は・・・

# 参考図書

